

15	14	13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1	水明インターネット句会（選句・選評） 令和六年九月
龍野		土璃 くろみ しーしー	朝香	鈍幹 絵夢	ありぎり す	聡美 喜夫		ありぎりす	破れ蓮			龍野 素風	佳月 鶴城 月を	あらか	
十重二十重砂丘の畝に葡萄生る	龍淵に潜みて待つやウクライナ	海端の街灯毎に鵜が一羽 <small>油絵のような景が目に浮かぶ。まるで街灯のてっぺんに飾りのように鵜が止まっている。見てみたい景ですみごとに一本づつ占拠しているさまが目には浮かびます。</small>	みたらしと餡をバランで秋遊び <small>みたらしと餡の団子が秋遊びにピッタリです。楽しい句。</small>	桔梗や刀自の折紙子ら倣う <small>桔梗・刀自・折紙の三重奏が、心地よく句の練度を高めている。</small>	山粧うレジの娘アイシャドウ変えた <small>山よそおうの季語にアイシャドウを持つてきた効果は成功です。</small>	朽ち垣を彩り隠す秋桜 <small>コスモスが綺麗に隠していてくれる。人生の黄昏時でも色鮮やかな花が咲くときもあります、色の対比が素晴らしい。</small>	刈り上げし項撫で行く秋の風	こほろぎに道を譲るや桃青忌 <small>草原で興枯くに道を譲ってあげたと言うことですが意外に大きくて目立つんですね。</small>	中天に朗々として月今宵 <small>「朗々として」が効いている。</small>	昭和びと只恋しくて木槿の忌	水澄みて心も澄みて妻介護	秋の湖水尾の揺るがす逆さ富士 <small>絵画的な作品である。</small>	夫婦でも薬味が違ふ冷奴 <small>仲の良い夫婦でも薬味の好みは別物、滑稽味が良い。異なるのは冷奴くらいにしておきましょう。</small>	兄弟の揃ひし写真盃蘭盆会 <small>仲の良い兄弟の集合写真かと思いきや、下五で遺影が隣り合っている光景に切り替わる意外性が見事だと思えます。</small>	檜鼻ことは
しーしー	棚々万波	横井あらか	網野月を	高原ひろし	雪待月田猫	幸子	衛	新井のり子	松田素風	瞳人	森佳月	安田蝸牛	ノルン		

30	29	28	27	26	25	24	23	22	21	20	19	18	17	16
		光雲2 しんい ことは 瞳人 総太郎 暮風	俳翁 凡士 鈍幹	佳月 ひでこ 鶴城 朝香 のり子 絵夢	くるみ ノルン	蝸牛	くるみ ひろ 蝸牛 俳翁 素風		たか	おじ1号		ひろ志 鈍幹 蛍のまま	霜里	
北東の空へ野分の忘れ雲	秋暑しそれでも妻は試合行	病む夫に新涼と言ふ処方箋	むご主人に少しも涼しさという心がよくでている。新涼という季病	よくわかる句です！	雲は秋プラットフォームだけの駅	妻からの労心声に夜なべ措く	慎ましい夫婦の姿が目に浮かぶ。	野分あと雲の向かうに宙がある	忙しい日々。偶には、のんびり過ごすのも良い。この句に同感。	五合も食べる二人とは色々想像してしまふ。	送り火や山風やさし煙立つ	自転車で嵐過ぎたり翳雲	鴨来る空の彩雲引き連れて	空高し今にして知る解いくつ
ひろ志	孤舟	新曆文		青木鶴城	くるみ	破れ蓮様	河野凡士	秋谷風舎	大東暮風	いさむ	和田イチ子 やん1号	光雲2	みづる	山川充

45	44	43	42	41	40	39	38	37	36	35	34	33	32	31	水明インターネット句会（選句・選評） 令和六年九月
	しんい	喜夫 のり子 ありぎりす	光雲2 梗舟			みづる			楽 政紀	朝香	楽 総太郎 京子 鶴城	光雲2		霜里 風子	
煙立つ秋刀魚の匂ひ幾久し	老人ホーム長き夜に聞く虫時雨 寂しさが身に沁みます。	刈り終へてきちきち帰るところなし 帰る家には誰もいないのか？きちきは孤独感なのか再出発なのか？ なんが考えさせられます。「動」の田植えと「静」の一人暮らしの対 比が大きい。草原で興梶くんに道を譲ってあげたと言うことです。意外 に大きくて目立つんですね。	水澄むや朝の陽に笑む摩崖仏 摩崖仏の前朝日にきらきらひかる水面の光景が見える。澄んだ水と朝 日に笑むのは摩崖仏でしたか。	夏夜バレーボール追う我を追う吾子	枝豆の相手次第よ喰ふ速さ	それぞれがお気に入り場所ふくろう お気に入りの場所にいるのはフクロウでもあり、それを愛でる人間で もありそう、至福のひとつとき。	幕間にいそいそ開く栗おこわ	クオーターの南瓜供へてりん鳴らす	カマキリの斬首オヤジの覚悟見た オヤジの覚悟見たがよかったです。取り合わせがダイナミック で響き合います。	鴟日和大関得手の上手投げ 私も相撲が好きです。下五の上手投げがいいですね。季語の幹旋が素 晴らしい。	引き算の余生となりぬ菊の酒 引き算の余生を精一杯生きたいと見につまされました。「菊の酒」の 幹旋が身にしむ中に格調を保っている。引き算の余生の措辞が良い。	月白や港離るるクルーズ船 月白とクルーズ船の取り合わせがいいですね。	手の切るるごときケント紙秋の風	秋日傘斜めにさして午後の客 日が短くなるのを感じる頃ですね。中七が秀逸、客の人柄を想像させ る。	
鈍幹	朝香	後藤允孝	絵夢	蛸のまま	小林京子	小林土璃	丸山マシミ	森下山菜	渡邊友也	かげろう	しんい	俳翁	龍野ひろし	ありぎりす	

60	59	58	57	56	55	54	53	52	51	50	49	48	47	46	水明インターネット句会（選句・選評） 令和六年九月
			暮風 ノルン あらか	かげろう	田猫	暦文	音思 一葉 マスミ			みづる	京子	あらか	ことは 破れ蓮	ことは	
命慾し更に金慾し系瓜棚	身に入むや玄関に置く夫の杖	蜘蛛の網（い）の出来上がりしにくも	虫の闇川の字に寝る山の宿 <small>夜中、旅館の一室で布団に横たわり、片耳で虫の声を、もう片方の耳で伴侶や子供の寝息を、心地よく聞いているのかな、と思いました。</small>	時違ふことなく咲くや彼岸花 <small>季節感が壊れてしまいそうな気候でも草木はきちんと営むものなのですね。</small>	男らの無言の唸り秋の蕎麦 <small>舌鼓とともに心身の疲れが消えてゆき、午後の仕事も頑張れる。</small>	待つ日々や髪をすく手に秋燈 <small>秋の夜に嫁入りを待ち嬉しさの中髪をすく姿が浮かぶ。</small>	花野ゆく能登に地割れし千枚田 <small>能登の地震災害となかなか進まない復興を想起させる句だ。千枚田は白米だろうかと地震による被災に追い打ちのような豪雨、以前の景観を取り戻すことを祈る。元旦の大地震からようやく立ち直りつつあったところへの今回の豪雨。腹立たしいほどの悲しみ。何とか頑張つて下さい。</small>	萩のトンネル潜るピンクのランドセル	曇り空それでも光る青葉かな	百日を咲き通してなお百日紅 <small>真夏の暑さにも負けず鮮やかに明るい花の生命力に元氣をもらおう。</small>	老いらくの早起き昼寝牽牛花 <small>上五中七の措辞がお上手、季語を牽牛花とした事がお手柄。</small>	月欠けて消ゆる魔法よ恋終はる <small>月の満ち欠けと恋の盛衰とを「魔法」の一語で関連付けているところが面白い。来月にはまた新しい恋に落ちていそう。</small>	身に入むやあらためて聞く子の齡 <small>「老いとは他者から指摘されて知る認めがたいものなのです」というボーヴォワールの言葉を思い出しました。人生の秋を感じさせます。</small>	宇宙から名月を見る令和の代 <small>寂しくもある科学の時代です。</small>	
染谷風子	木村小麦	岡本たか子	ひでこ	岡田芳春	松橋政紀	持永喜夫	岡崎梗舟	渋谷きいち	川口聡美	霜里	平野楽	立野音思	荒一葉	総太郎	

75	74	73	72	71	70	69	68	67	66	65	64	63	62	61	水明インターネット句会（選句・選評） 令和六年九月
							月を		蛩のまま 榎舟 絵夢 みづる	蝸牛			音思 破れ蓮 瞳人 風野 暮龍 凡士 しーしー	しんい	
夏空やとんび留まりてひとりごと	夕飯と朝昼お里の芋煮しめ	川風に解るる前髪待ち宵の月	人類の永き旅路やひつじ雲	夢も恋も弾けてしまふ鳳仙花	星飛んで踏みこたえたる段差ニセンチ	芋嵐一日遠きバースデー	穂芒の明るさ頼る裏の径 芒の明るさに惹かれました。	縁先に吹く風秋気含みをり	手鏡に映る満月ふところに 子どもが満月を大事に抱えているような姿が想像され、とても可愛らしい。手鏡に名月が映っているのを見て、何か思いが高まったのでしよう。水おとが消えて急に虫の音が高く聞こえる。満月を独り占めできて気分は最高ですね。独り占めしたくなるほど美しい月を懐へ隠す発想が面白い。	蝓螂や斧をかざして身構へり 「斧をかざして」という措辞が巧みである。	新走なめろう詔へ滋酔郎忌	空蟬や仲間外れの子がひとり	厨ごと仕舞ひてからの虫時雨 秋の夜長の寂しさを感じさせる句になっている。さあ、ゆつくり、虫どもの、この間に聞入りましようか。ホッと一息で聞こえてきた虫の心、秋の夜はこれから。やつと一息ついたころの虫時雨はさぞかし心地よいのでは。雑事を離れた、束の間の安らぎが感じられる。	洗ひ髪乾く間もなく人に会ふ 「七夕や髪ぬれしまま人に逢ふ」が好きなので雰囲気に共感。	ノルン
横井あらか	しーしー	棚々万波	雪待月田猫	網野月を	高原ひろし	新井のり子	幸子	衛	森佳月	松田素風	瞳人	檜鼻ことは	安田蝸牛		

90	89	88	87	86	85	84	83	82	81	80	79	78	77	76
楽 かげろう 月を	かげろう		高原	一葉 ひろ志 山菜		素風	凡士 佳月 ひでこ		聡美 蛭のまま 霜里 風子			聡美	土璃 一葉 しーしー 山菜	
梨剥いた指でめくれる古語辞典 も見ていませんやうに。 梨を剥いていて俳句が浮かんだのでしようか？古語辞典が句を引き立てていると思います。自分はスマホが操作できるようになります。誰	残暑の厳しさが壁の色に出ますね。 白壁の白の白増す残暑光	昼日中待った甲斐あり秋の涼	仲違い許す彼女や猫じゃらし	五箇山の縄もて縛る新豆腐 縄もて縛るほどの硬い五箇山豆腐、今年も新豆腐の季節だ。あの味が忘れられない。五箇山の「堅豆腐」は、真つ白でずつしりとした重厚感がある。あの新豆腐がまたうまいんだなあ。	靴音の近づいてくる虫の闇	友からの存問を受く台風過 よき友の存在を窺わせる。	二世帯のチャイム二つや虫時雨 平凡な新興住宅地の一側面を切り取つて秀逸。二世帯のチャイムが、時にはうるさい虫の声と重なり、共感する。	山栗や対の茶碗に飯を盛る	わが田にはあらねど嬉し稲穂かな 稲穂が効いている。時世とご自身の気持ちを重ねて詠まれている。価格も高騰しているが店頭にあるだけでほつとす。実りの秋の喜びと感謝。日本人誰しもこう思う、リズムも良い。	秋の水去年の席に献盃す おじいち やん1号	太鼓祭り市長の叩く初太鼓	猫じゃらし散歩の犬と戯れて 猫じゃらしと犬の食い合わせが妙。	藍建ての呟く甕（かめ）へ望の月 「呟く」がいいですね。藍染の甕に発酵が進む、その静寂に月光が降り注ぐ。耳をすませば泡音の呟きだけが聞こえてくる。見事な描写である。甕の水面に映る高く上がった月、泡の呟きが静かさを強調している。藍だてがやはりつぶやいていましたか。	風変はり仲直りせむ今朝の秋 みづる
ありぎりす	青木鶴城	孤舟	新曆文	河野凡士	くるみ	破れ蓮様	いさむ	秋谷風舎	大東暮風	おじいち やん1号	和田イチ子	山川充	光雲2	みづる

105	104	103	102	101	100	99	98	97	96	95	94	93	92	91
				瞳人 マスミ 梗舟 たか 田猫	喜夫 田猫		たか	曆文 俳翁 おじ1号						曆文 高原 マスミ
新NISAする歳でなし秋涼し	鈴虫や隣の庭の居候	野分跡庭の一花（ひとはな）すくと立ち	平泳ぎクロールしては平泳ぎ	中秋の月や火照りしまま昇る <small>月がホット、とは、今年まつたく、そう感じても不都合はありませぬ。今年の異常な猛暑。折角の中秋の名月も火照りながら昇つて来た。今年の夏はそうでした。長い間雨も降らない。酷暑のなか中秋の月は昇る。気候変動。これからどうなってしまうのか？作者の嘆きが感ぜられる。高温多湿の中で迎える中秋の名月。素直な実感と、今後の温暖化への危惧が滲む。</small>	星月夜なんとにぎやかな静寂よ <small>星が降ってくる、自然の美しさが手に取るように素晴らしい。輝く満天の星々を「にぎやか」と詠む視点が斬新。</small>	駅前のカレー屋匂ふ翳雲	秋風にダツシュ我が子は汗まみれ <small>運動会。一生懸命練習してきた。汗まみれになって頑張りトップになつた我が子を誉めてやりたい。</small>	日照雨来て瑠璃を深むる蛍草 <small>夏も終わり、ふるさとは早くも初秋。季語をいかせるきれいな詠みである。瑠璃を深めるが美しい。</small>	賢治の忌米四合は誤記なるや	露けしや飯盛山の隊士の碑	月星夜古墳の稜の浮かびけり	秋うらら見入る垣内の伸子張り	初秋の浪をぶつ裂き高速艇	ふるさとは法師蝉へと鳴き変はる <small>螢草の瑠璃色は雨に洗われ色増を増す。このお句の故郷は山がちのところが。たのたの。さいたま辺りは残暑厳しいのに、ここでは法師ゼミの声が。でも昨日今日は市内でも「秋」を感じられて嬉しい。</small>
総太郎	絵夢	朝香	蛍のまま	後藤允孝	小林土璃	小林京子	渡邊友也	丸山マスミ	森下山菜	俳翁	かげろう	しんい	ひろ志	龍野ひろし

120	119	118	117	116	115	114	113	112	111	110	109	108	107	106
政紀 山菜 ひでこ	政紀	総太郎 ノルン 風子						土璃		おじ1号	音思	のり子		高原 京子
大系瓜色即是空と下がりをり <small>色即是空が効いています。大系瓜が下がっている様子を色即是空と表現しているのが何ともおかしい。</small>	新酒酌む家老一派の奥座敷 <small>家老一派が囲む新酒がいい感じですよ。</small>	身に入むや吾子に白髪をみつけたり <small>77歳の私にはこの気持ち良くわかる。</small>	秋風や鼻で水浴ぶアジアゾウ	岸部立つ水辺の詩人泡立草	能登の朝顔咲き終わりてももらい水	虫の声もひとつ伸びるストレッチ	雨が降り風に揺れてる青葉かな	愛猫の水飲む音や身に入む夜 <small>しんと静まり返った夜のやるせなさを感じる。</small>	大広間三味の稽古か霧の宿	深き夜や虫鳴く声も京訛 <small>京訛りのささやきが静寂さを引き立たせている。</small>	虫時雨確かな明日はないものを	百年を生きる途中の渡り鳥 <small>圧倒的に読み手をリラックスさせる句。</small>	花野分け入れれば幼き日と出遇ひ	秋暑し吐けば弱音になる本音 <small>季語との取り合わせ、弱音と本音の対比が良い。</small>
染谷風子	ひでこ	木村小麦	岡本たか子	持永喜夫	岡田芳春	松橋政紀	川口聡美	岡崎梗舟	渋谷きいち	立野音思	霜里	平野楽	鈍幹	荒一葉